

## 年間第33主日の説教

金 大烈 神父 2009年11月15日(日)

### 《死への準備は愛の実践》

おはようございます。

1833年10月21日に生まれ、1896年の12月に死亡した人物がいます。

その人物の名はアルフレッド・ベルナルド・ノーベルです。ノーベルについては皆様よくご存知ですよね。今日はこの人の人生について皆様にご紹介させて頂きたいのです。なぜなら、全ての人間に共通して言える事だと思のですが、この人も、波乱万丈な物語を持つ人生を送った人です。

さあ、この人はご存知のようにダイナマイトの発明者です。しかし、開発中に色々な犠牲を払うことになってしまいました。まず、自分自身の末の弟を工場の爆発事故で失います。余りにも犠牲者が多く出たので、国からも「気違い科学者」とものすごく批判され、世論が騒がしくなり、あちこちから退けられます。しかし、彼はあきらめず最後までやり遂げました。結局、33歳の時にダイナマイトの発明に成功します。そして、大きな名誉と莫大な富を、本当に巨大な富を得たのです。

30年が過ぎ去ったある日の朝、新聞を読んで仰天します。なぜなら、ある記者が間違えた情報を新聞に載せてしまったからです。その内容はノーベルの死亡についての記事でした。自分は生きているのに、何故この様な記事が載ってしまったのか、載せられてしまったのか、ものすごく驚きました。

しかし、彼を最も仰天させたのは、記事のタイトルでした。そのタイトルは【ダイナマイトの王・死の事業家・破壊の発明家・死亡】と、書いてあったのです。それを読んだノーベルはこの様に思ったそうです

「もし、今日私が本当に死んだら、人々は【死の事業家・破壊の発明家】と評価し、私が死んだ事を誰も悲しんでくれないのでしょうか」と。

それで、彼はこの不名誉なイメージを残さず、生命を生かす役割、命を生かす役割をしたいと考え、亡くなる3年前に遺言を残します。自分の全財産を人類の糧と発明に貢献した者に役立ててほしいと、ノーベル財団法人を設立します。そして今の時代までそれが継続されています。

今日、私達が読んだ福音(マルコ13・24~32)の内容は終末についての話です。誰でもこの終末の話を聖書で接する時には、怖い気持ちになります。「本当か」と思いながらも、面白いのは「自分とはまだ距離がある、まだ遠い話しである」と思い、出来るだけこの終末の話は避けようとするのが、信者でありながらも私達に見られる姿ではないかと思えます。

しかし、私達が終末という言葉に触れた時、二つの面で考えなければなりません。

その一つはまず、私達各自が迎えなければならない個人的な死です。その死。個人の死。しかし、私達は「遠い話だろう、私にはまだ」とわざわざ思いながら、死と関係ない生活をしようと色々頑張っています。例えば、明日になったら全部失うものに、今日も命をかけて得ようと頑張っています。それが私達の姿です。

そして、二つ目は、今日の福音でイエス様がおっしゃった、『ただ御父だけが知るその日、その時』が来る。「その日には御父に使わされて、私はこの世に又現れる」これはイエス様の約束です。

その日が、本当にいつ来るのか誰も分からないでしょう。しかし、確かな事は、近いうちに私達も皆、死を迎えなければならないのです。

結局、今日の福音のメッセージは全体の終末だけでなく個人の死についてもいつも準備しなさいと

いうメッセージです。

これは歳と関係ありません。健康と関係ありません。いつ私に来るか分かりません。これも多分、御父にしか分からないでしょう。そしたら個人の死、個人の終末を準備する事って何でしょうか。

ものすごくシンプルな事です。とても簡単です。それはイエス・キリストが教えて下さった“愛の実践”です。“愛の実践”。私達はどのくらい本当に心こめて、愛の心で、人々を見ているかよく考えてみましょう。

いつも繰り返して皆様に強調させて頂いた言葉なのですが、私達が、神様の御前に立った時、神様は「あなたは、何をしてきたの？」と、お聞きになると思います。「私はある会社の社長でした。ある学校の先生でした。ある教会の司祭でした。」この様な答えは意味がありませんし、そういう質問はされないと思います。唯一つの質問は「どのくらい愛したか、あなたに与えた色々な関わりの内でどのくらい愛したのか」という質問しかされないと思います。

皆様、結局どの様な生き方でもその中に愛があってほしいのです。

ですから、信仰の生活は、愛を習い“愛を実践”しようとする生き方ではないかと思えます。

今日の福音の終末の話は、準備しない者、していない者には怖いものでしょう。しかし、信者である私達はいつも愛を償う者として、それをする心を持っていると思えます。

さあ、これからも、自分はどれくらい愛の生活をしているのかよく考えて見ましょう。

ありがとうございました。